

ユング心理学の〈現在・過去・未来〉

ギーゲリッヒ論集

ヴォルフガング・ギーゲリッヒ，
猪股 剛，兼城賢志，宮澤淳滋著

左右社，四六判 464 頁，6,050 円，2025 年 3 月刊

(佛教大学教授・プラクシス鈴木) 鈴木康広

難解で知られるギーゲリッヒ氏の論文集であるが、適任の訳者を得てこなれた日本語文になっている。〈現在・過去・未来〉に対応して第一章・第三章・第五章に氏の論考が据えられ、それぞれ各章に対峙し消化する形で宮澤淳滋氏が第二章，兼城賢志氏が第四章，猪股剛氏が第六章を自分のことばで語り、独自の対話を行っている。

氏の論考は、ユング心理学の基礎知識が前提となっているため、初心者というよりは中級者から上級者向けであろう。ユングの論考を「正」とすれば、それに対する氏の批判的論考は「反」であり、それらの弁証法的止揚を通して「合」に至ろうとする、深みと滋味がある。ユング心理学の基礎知識なくして、最初から氏の論考から入るのはおすすめではない。その意味で、とっつきやすい「昔話」を取り扱った第三章・第四章から読み始め、全体のまとめでもある第六章、ついで第五章といった具合に読み進めるのも一法かもしれない。大作である第一章は、「ボーリングン塔」と「ユング邸」の心的世界の対比は分かりやすいが全体に難解で、〈過去・未来〉を踏まえたうえで〈現在〉にすすめば理解が深まるのではなかろうか。

かつてグッケンビュール氏がヒルマン氏の論考を「たらいの産湯を捨てようとして赤子ごと捨ててしまう」(もともとはユングの表現からの引用)と評したことがあるが、批判的な「反」ばかりを強調しすぎると、もともとの「正」を生かしきれなくなる。「批判は創造的であるかぎりでのみ正しい」(ユング, 1952/1988, p150)。「合」として止揚するダイナミズムは創造的である。ギーゲリッヒ氏の真骨頂はそこにある。ただ、蛇足ながら、「赤子」を大事にすることも忘れてはなるまい。

ユング心理学は現代的意義を失ったというギーゲリッヒ氏・猪股氏の〈現在〉への指摘と問題提起は、鋭くて深い。だからこそ〈過去・未来〉を通してユング心理学にとどまろうとする。「反」を通してのものがきと痛みがここにある。過去を知った上で、この現在に根をはり、現在に起きている心の動きと共に、考えて、感じて、こころに取り組んでいくことが、いま心理学に求められている、と論じている。

第一章では、宗教的な世界観が終わりを迎えた〈現在〉を、忌憚なく、誠実に、その痛みを感じしながら、徹底的に論じている。第三章では、われわれの深層にリアルに存在して、個人性を超えた魂のあり方が詳述されている。一つひとつの物語に冒険的に、あるいは献身的に入り込むこと。第五章では、深く現在にコミットすれば、そこから何かが立ち上がってくる。現在であると同時に未来の種子を含んでいると論じている。

これらを受けて猪股氏は、心理学的作業は、苦しく痛みを伴う現実を私たちに突きつけてくる。それをどのように受けとめ、それとどのように関わるのか、それは私たち一人ひとりが心理学的に引き受けていく課題であろう、と結んでいる。

是非、一読をおすすめしたい問題作かつ大作である。